

安楽寺だより

第 28 号

紙面内容

- 2面 「念仏者は無碍の一道なり」住職
- 3面 本山春の法要を終えて 若院
- 4面 日本仏教史⑪ 明治時代(上)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

譬えば、人ありて西に向かいて行かんと欲するに百千の里ならん、忽然として中路に二つの河あるを見る。一つにはこれ火の河、南にあり。二つにはこれ水の河、北にあり。二河おのおの闊さ百歩、おのおの深くして底なし、南北辺なし。

二河白道のたとえその②

善導大師が説かれた『二河白道』の本題に入ります。浄土往生の道を求めて歩もうとする人が、『ふと気がつくと突然、二つの河が現われた』とは、何十年と人生を送ってきた人が、仏さまから真実の教えに出遇う縁を与えられた。これは、「苦悩を知り、苦悩から救わりたい」との願いが私自身に生まれたことをあらわしています。つまり、今日ここに存在している私自身の上に、二つの河を見いだしたのです。

『一つは火の河、もう一つは水の河』火の河とは、瞋憎(しんぞう)のこころのことです。怒り・腹立ち・憎しみのこころは、人格的なこころをすべて焼き尽してしまうほどの激しいものです。水の河とは、貪愛(とんない)のこころのことです。「人生で一番大切なのはお金と健康だね」など、我愛のこころを追い求め、



わが身が可愛いというこころから一步も出ることができず、いままで私のこころに真剣に向き合ってこなかった私。しかし、「火の河、水の河」が、私の行く手を遮っていたのです。思いどおりに生きたいと願っていた私ですが、幸せを求めても、どういうわけか不安と疑いに襲われるのです。そして孤独感が募ってまいります。つまり、二つの河が現われたのは、「私の本当のこころを知る時が来た」という「たとえ」のお言葉です。

「火の河・水の河」が私の身にあると知る

『二つの河はそれぞれ向こう岸まで百歩』とは、貪欲・瞋恚の煩惱は百年続く、つまり煩惱は一生涯続くことをあらわしています。『深くて底を知ることができない、南北に果てしなく広がっていた』とは、人間の抱える煩惱は、深さがしれないし、果てもなく広がり、どこまでも私に襲いかかってきます。煩惱の正体に気づき、そしてうなずくことが、真宗の教えを聞き、その中に生きていく道を見いだしていくことに繋がるのです。

今回は、私たちの歩むべき道についてのお言葉をお伝え致したいと思います。

「念仏者は無碍の一道なり」

六月十八日、安楽寺会館にて西田葬儀社主催のふれあい感謝祭が開催され、その中で法話をする機会をいただきました。



浄土真宗のおしえに「ナムアマミダブツをとなえる」ことがあります。四年ほど前、ご縁をいただいてインドへ仏蹟参拝旅行に行

ました。インドの皆様は、合掌して「ナムASTE」と挨拶されますが、日本人は挨拶する時に、「ナムアマミダブツ」とは言いませぬ。私たちは、どんな思い・どんな願いを持って、合掌してお念仏をとなえるのでしょうか？ 亡くなられた方を偲んでとなえる、願い事が成就するようにとの思いでとなえる、また人生の苦しみや悲しみから救われたいとの思いでとなえる等々。

浄土真宗を開かれた親鸞聖人は、『念仏者は無碍の一道なり』と、申されます。「念仏の道は、私たち人間がつくる道ではなく、仏さまの方から与えられ、仏さまの方から開か



会館にお出かけいただいた皆様

れる道です」とおっしゃっています。お念仏をいただく者は、「さわりのない、自分の思いにとらわれない、縛られない生き方で歩む人」ということではないでしょうか。

私たち人間は、その時々々の時代や社会の価値観などに縛られて生きています。戦前は、「お国のために身も命も捧げる」との軍国教育や国策で戦争に突入していきました。戦後は、「経済発展・生活向上をすべて

に優先させる」との政策で地球規模の環境破壊が進んでしまいました。人間の飽くなき欲がつくる世の中の姿(事実)に気づかずに生きていくように感じます。

また、私たちは、様々な思いにとらわれて生きています。たとえば、お葬式の後に清め塩を使うことはありませんか？「死の穢れを清めるために使う」のでしょうか、この世に生きる万物は、すべてこの世を去る時が来ます。その事実をしっかりと受け止めることが大切であり、死は決して穢れではありません。

昨今の日本は、人の最後の看取りに立ち会うことは大変難しい時代です。皆様にお願いです。状況が許すならば、お葬式の時にお孫さん・ひ孫さんと一緒に、火葬場で手を合わせ、お遺骨を拾う、亡き人の最後の場に立ち会って頂きたいのです。「誰でも死すべき命を生きている身ですよ」と伝える大切な教育の場ではないでしょうか。

お念仏の教えは、決して知識や教養のためにあるのではなく、今の時代・社会の有様や、今生きている私の生き方をしっかり見つめ、私が「仏さまから願われている身である」と気がついていくための教えではないでしょうか。

まとまりのない拙い話しを最後までお聞きいただきました皆様にお礼申し上げます。

初めての東本願寺出仕に感激

春の法要を終えて 若院

今年四月一日より四日まで東本願寺にて「春の法要」並びに「闡如（せんによ）上人二十五回忌法要」が厳修されました。毎年十一月に執り行われる「御正忌（ごしょうき）報恩講」とならび東本願寺で行なわれる大きな法要のひとつであります。

春の法要とは、親鸞聖人の御命日を機縁として八日間通してお勤めをする報恩講とは少し異なり、「親鸞聖人御誕生会」や「全戦没者追弔法会」など一日ごとに法要する意義の違う内容になっています。

中でも二日目の「全戦没者法会」は、境内で平和展等々を開かれていることもあり、毎年多くの参拝者がお集まりいただいております。

今年は少し気候がずれ込んでいたこともあって、桜の見頃の時期より少し前でしたが、「春の法要」に名古屋教区の准堂衆（しゅんどうしゅう）としてお勤めに出席させてもらいました。

今年で准堂衆の資格をいただいで三年が経ちました。毎年の東別院の報恩講や昨年四月に開かれた「名古屋別院宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要」には出仕させてもらいましたが、東本願寺の法要に出るのは初でしたので、いい緊張感のもとお勤めさせてもらいました。

全国から総勢五〇名ほどの准堂衆が外陣（げじん）で出仕するなかで、お勤めの調和の難しさであったり、また東本願寺をお守りされている堂衆（どうしゅう）の方たちの声を間近で聞き、一緒にお勤



春の法要の勤まる東本願寺阿弥陀堂

墓盆法要参拝ありがとうございました

7月15日(土) 永代供養墓ご参拝の様子



めさせてもらえたこと、自分にとって物凄くいい経験をさせてもらえたことと感嘆の思いでいっぱいでありました。今年には闡如上人二十五回忌もあり、改めて今まで続けてきていることの有難さ、そして親鸞聖人の教えを伝えていかなければならない思いにかられています。

また来年も東本願寺にて四月一日より「春の法要」が勤まります。その前にも十一月二十一日より「御正忌報恩講」が勤まりますので、ぜひご参拝いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

仏教豆知識

第二十八回



日本の仏教

歴史 その⑪

明治時代(上)

江戸時代中期より、本居宣長を祖とする「国学」が興隆し、民族精神の優秀性・絶対性を強調しました。特に平田篤胤は神道を唱え、真宗と日蓮宗を排撃し、幕末期の政治的・思想的な背景となりました。薩摩・長州出身者は、「尊皇攘夷」運動を起し、明治維新を成し遂げ、その後、新政府は天皇を中心とする近代国家を目指します。

その宗教政策として、一八六八年（明治元年）神仏分離令を出して、神社と寺院を区別し、「神道」を国家の中心とする国づくりを推進します。その結果、仏像・経巻の破棄、廃合寺、僧侶の還俗など廃仏毀釈の動きが各地で起こりました。政権基盤がまだ脆弱であった明治政府は、廃仏によって人心の動揺を恐れ、仏教政策の転換を余儀

なくされました。一八七二年（明治五年）神祇省を廃して教部省を新設し、諸宗合同の研究機関として大教院を設け、各宗派に教導職制を置き国民の教化に当たらせました。

しかし、明治政府は、「神主仏徒」の立場は変えず、大教院では、僧侶に祝詞（のりと）を唱えさせ、神道儀式への参加を強制しました。そのため、西本願寺の島地黙雷・東本願寺の石川舜台など、真宗を中心として大教院分離の運動が起こりました。そして、一八七五年（明治八年）に分離が認可され、まもなく大教院・教部省が廃止されました。



廃仏毀釈にあった四つ割の南無阿弥陀仏碑

「核兵器を持たず、作らず、持ち込ませず」の非核三原則を政策とする日本が今月七日採択された国連の核兵器禁止条約に参加していません。日本政府は、「核保有国と非保有国の対立を深め、かえって核兵器なき世界を遠ざける」などの理由だそうです。▼七十二年前の広島・長崎への原爆投下による被爆者（ひばくしゃ）の今も続く苦しみの現実、また福島第一原発の事故による数十万の被災者の現実を見るならば、核兵器禁止条約締結のために先頭に立つべき責務が日本政府にはあります。▼アメリカの核の傘に守られているとか、北朝鮮のミサイルに対抗が必要との「現実の政治」を論じる政府の対応は、「核は人類にとって受け入れがたい」と、核廃絶を訴える被爆者・被災者の切実な叫び声に答えていません。▼「明快な真実は、核戦争に勝者は存在しないという、ただそれだけ」近衛忠輝国際赤十字会長の言葉が胸を打ちます。